様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月２８日現在

機関番号：３３９０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０７２２

研究課題名（和文）　王国体制下のコミュニティ支配に関する研究－コンバウン王国の事例から－

研究課題名（英文）　A study of controlling local communities in the pre-modern period--the case of the *Konbaung* monarchy--

研究代表者
伊東　利勝（ITO TOSHIKATSU）
愛知大学・文学部・教授
研究者番号：60148228

研究成果の概要（和文）：王国内の地方村落コミュニティはアティー（平民）とアフムダーン（王務員）で構成されており，これらは人格的紐帯に基づく別々の支配体系に組み込まれていたので，村落の中で住民相互の利害が一致しなかった。日常生活は同一サイクルで展開されていたが，集落に住む人びとの心理的凝集性，すなわち村という社会単位への帰属意識は二次的であった。従ってこうしたコミュニティの中での我われ意識は流動的で，民族なる自覚（エスニシティ）はいまだ生まれていなかった。

研究成果の概要（英文）： As most of the local communities in the early *Konbaung* period were constituted of the *Ahumdan* (crown service group members) and the *Athi* (the common people), who were each governed by different systems comprising networks of individual relationships based on the personalities of their headmen, the social interests of the two groups did not always match. Though a villager's daily life in the community went on in the same cycle, his/her psychological cohesion or identification with the village as a social unit was secondary. Therefore, 'we' consciousness was also unstable and a sense of ethnicity had not been formed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：民族，エスニシティ，コンバウン王国，アフムダーン，コミュニティ，村落

１．研究開始当初の背景

前近代の王国においては，民族ごとに地縁や血縁によってコミュニティが形成され，これらはそれぞれの首長を通して支配してきたとされる。そのため彼ら独自の共同社会は，信仰や習俗とともに維持・温存され，民族としての共通理解さえも形成されていたと理解されてきた。

そして近代になって国民国家がたちあがる際には，これらの民族（あるいは原初形態としてのエトニ）がアクターとなり，ナショナリティやエスニシティが形成されたとさ

れる。
たしかにコンバウン王国の場合も，シャン族はシャン人の首長を通して，カレン族はカレン人の差配を通してという具合に，民族縦断的に徴税や賦役の配分が行なわれていたことが明らかになっており，王朝興亡史も，民族をアクターとして描かれる場合が一般的であった。
しかし「民族」横断的に支配を受けるコミュニティも存在した。また「民族」区分に基づく支配であっても，それぞれが王権に直結していたわけではなく，これらは中間段階において職能ごとに再編成され，「民族」の境界を無視した支配組織が形成される事例も知られていた。こうした状況のもので果たして，「われわれ～民族」という意識が存在しうるものなのかの検討が迫れていた。

２．研究の目的
18 世紀後半から 19 世紀前半にかけて，ミャンマー・エーヤーワディー流域地方におけるコンバウン王国支配下の村落社会は，「民族」横断的に形成されたコミュニティで，これらがいかにして形成され，どのような原理に基づいて統治されていたかを，徭役・租税制度やコミュニティ首長権の検討をつうじて明らかにする。その際，多様な構成原理を有する諸種のコミュニティは，原初的もしくはそれに先行する時代の遺物としてとらえるのではなく，王国政府が地方統治の必要上，みずからの外部に作り出していったという視点のもとに考察を進める。そして前近代社会において，「民族」区分は統治上意味をなさず，支配の基本は職能や人格に基づく紐帯のネットワークによるものであったので，いまだに民族意識なるものは形成されていなかったことを明らかにする。

３．研究の方法
コンバウン王権の支配が直接及んだ地域であるエーヤーワディー流域地方を例にとり，騎馬隊，楯兵隊，象兵隊などのアフムダーンを主たる構成員とするコミュニティに注目することによって，王国政府がこれを支配するのに用いた徴税（徭役）制度や行政制度を，地方的偏差に注意しつつ検討する。
基本史料として，植民地時代最初期に残された行政文書や王国時代の地方文書を用い，各アフムダーンにみられる「民族」的属性，当該組織が設立された時期の解明からはじめ，それらに課された徭役・租税の内容，次いでコミュニティ内やこれをめぐる支配行政組織を明らかにする。
まず植民地時代最初期に出された，*Settlement Report* や *Gazetteer* に含まれる，県（District）ごとの社会経済調査記録から，王朝時代末期，各地に存在した「異民族」アフムダーンの職能と分布，その支配組織，さらには当該組織（連隊・団）形成に関する伝承を抽出し，これをデータベース化する。
次いで植民地史料による調査を参考にしつつ，18 世紀末から 19 世紀はじめにかけて，各ミョウ（町）やユワー（村）から提出されたシッターン（調書）の中でアフムダーンが提出したものを抽出し，その地理的分布や当該連隊や団の戦略上の位置づけ，形成過程およびこれと地方開発との関連等を明らかにする。またアメインドー（勅令）・ウーパデー（法令）などの中に述べられている租税や徭役に関する記述に注目し，職能つまり騎馬隊や銃兵隊などによって，また同じ職能でも，地方によってこれらに違いがあったかどうかを明らかにする。
これと並行して，アフムダーン・コミュニティの統廃合，その首長である連隊長や団体長の任免に関する文書を調査し，各連隊や団を組織する際の具体的方法やその制度化への動きを明らかにする。これには勅令や，当時，司法・行政の最高決議機関であった国務院に提訴された首長の任免に関する案件を扱ったフルットー・ピャッサー（裁定書）を用いる。
またシッターンとともに提出されたサーイン（住民表冊，世帯簿）の分析により，当該町村におけるアティーとアフムダーンの割合や，表冊の摘要欄に示された原籍情報から，住民移動の様相を描き出し，そこに形成されたコミュニティの内容を考察する。
これらは主としてミャンマー古文書の解読と平行して進められるが，個人でこれを行った場合は，誤りを犯す場合が多々ある。日本国内に存在するミャンマー史研究者やミャンマー人歴史研究者の協力も仰ぎ，全年度にわたり，定期的に古文書読解検討会を持ちつつ，調査研究を行った。

４．研究成果
先ず予備的な研究として，カレン民族を例にとり，人間は同一文化・言語によっておのずと纏まり，これが自己のアイデンティティの最上位に置かれるという見解に対して、前近代における「民族」名称は、単に人間をいれる器の形、つまり外見に名付けられたようなもので、その内面までも規定するという発想はなかったことを，王国時代に作られたカレン・オーダンと称される歌謡を中心に，その内容を分析することによって明らかにした。そしてこれとの関連で，エーヤーワディー川流域地方において、現在でいう民族なる概念は、19 世紀中期段階ではいまだ成立していなかったことを，1856 年から 1858 年にかけて南部デルタや東部山地地域で発生した反乱内容を検討することによって明らかにした。

次いで，コンバウン王国前期社会全体にみられるアフムダーンとアティーやアフムダーン内の区別が、住民支配及びこれが生み出す人の分類とどのような関係にあったのかの考察を進めた結果，「異民族」アフムダーンは，エーヤーワディー流域地方では，17 世紀頃から制度的・継続的に形成されたこと，及び年月の推移とともに，こうした「異民族」は「ビルマ」に同化していったものと思われるが，王室側は，「異民族」とりわけ戦争捕虜ということで，特別に警戒していなかったこともあり，王国末期まで存在し続けたことが明らかになった。

同時に，ひとつの村落コミュニティがひとつのアフムダーンによって形成されていることはまれで，彼らには通常別々の村に住居地や耕作地が与えられたが，そこでの生活を送る中，結婚や生活上の必要から，他所へ住居を移すことがよく行われ，かつ当時の村落社会がこれを容認していたこと，アフムダーンや「異民族」が，社会的に隔離され，かれらは集団で住まなければならないという制約はなかったことが明確になった。

さらにひとつのコミュニティ内にアティーとアフムダーンが，また別々のアフムダーンが同居していることは，騎馬兵アフムダーンにおいても普遍的に認められ，このアフムダーンが中央平原一帯にあまねく存在していたことかれみて，地方の村落コミュニティは，ほぼアティーとアフムダーンによって成り立っていたという理解にいたった。

またひとつの集落や村落それぞれに居住する住民が，同じ支配組織のもとに置かれていたわけではないので，住民相互の利害は当然一致しない。住民の生業は基本的に農業であったので，日常生活は同一サイクルで展開されており，生活を営むうえで協同することはあっても，この集落全体が一致して，納税や徭役の負担に対応するということはほとんどなく，そうした意味で村の縛りなどは存在しなかったと考えなければならなくなった。

王室は住民を，集落や村落を通して支配したのではなく，アティーとかアフムダーンごとに支配していた。従って地方に形成された村落コミュニティは，国王による支配を支えるために形成されたものではない。いわば住民生活の必要から生み出されたものである。コンバウン王国の支配機構は，すでに存在していたものとしての村落をその末端とし，これをどのように支配するかという目的で組み立てられたものではなかった。

人間の中に形成されたコミュニティ意識は，物的実体を伴っているわけではないので，きわめて流動的である。そのためコミュニティに対する強いアイデンティティ意識も醸成されない。当該コミュニティを抜ければ，また違った支配を受け，社会的にも違った存在となる。こうして村に住む人びとの心理的凝集性，すなわち村という社会単位への帰属意識も二次的となる。

東南アジア農村社会研究はこれまで，王国時代を自給自足に基づく、ある意味閉じた社会としていた。従って当時の村落は単なる居住地というわけではなく、ひとつの境界に囲まれた土地とセットになった共同体を形成していたと考えられていたのである。しかし本研究から，当時の村落も現代と同様，その集団的凝集性は存在していなかったと考えなければならなくなる。従ってこうしたコミュニティの中で「民族」は、いつでも変更できる属性としての意味しか有していなかったことが明らかとなる。

現代社会における民族は、制度的に強固で永続的な村落、自律的な村落といういわゆる，土地（地域・領土）を媒介とした共同体概念とセットになったもので、一定の場所への緊縛を前提としたヨーロッパや日本における村概念を基礎に作りあげられたものであることが分かった。

本研究を遂行する過程で，これに関連する重要史料である，大英図書館に所蔵されている India Office, Political Proceedings, Foreign Department (IOR/P/204)に散見されるマンダレー日記を収集し，1864 年 4 月 13 日から 1867 年 4 月 6 日までの分を校訂し，資料として PDF で公開できるようにした。

また現地調査のために作成した，デジタル化されたミャンマーの地図（５万分の 1，12 万５千分の 1，空中写真測量要図）2,131 点を PC 上で容易に検索でき，かつ画面上で拡大縮小できるようにしたシステムを構築し，これを内外のミャンマー史研究者に配布した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 伊東利勝，コンバウン王国前期における村落コミュニティについて，愛知大学文學論叢，査読無，148 輯，印刷中。

② 伊東利勝，ミャンマーと民族問題，ワセダアジアレビュー，査読無，12 号，2012，30-35.

③ 伊東利勝，1856～58 年「カレンの反乱」のカレンについて，愛大史学，査読無，21 号，2012，45-92.

④ 伊東利勝，ビルマ古典歌謡カレン・オーダンの眼差し，愛大史学，査読無，20 号，2011，43-78.

⑤ 伊東利勝，書評 斎藤照子『東南アジアの農村』，東南アジア―歴史と文化―，査読

有，39号，2010.
〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計１件）
① 伊東利勝編著，めこん，ミャンマー概説，2011，731.

〔その他〕
ホームページ等
http://taweb.aichi-u.ac.jp/DMSEH/

６．研究組織
(1)研究代表者

伊東　利勝（ITO TOSHIKATSU）
愛知大学・文学部・教授
研究者番号：60148228